

特定非営利活動法人 Learning for All

〒160-0022 東京都新宿区新宿五丁目1番1号ローヤルマンションビル404号室
TEL 03-5357-7131 (受付時間: 平日10時~17時)

ご寄付のご案内

1. WEBサイトから寄付をする

<https://learningforall.or.jp/support/>

右記WEBサイトから寄付を受け付けています。
「LFA 寄付」でも検索可能です。

LFA 寄付

検索



2. 銀行振り込みで寄付をする

右記のフォームからお申し込みください。振込口座をご連絡します。



祝! 認定NPO



目次

- 1 代表メッセージ
- 2 ビジョン/ミッション
- 4 3つのアプローチ
- 6 2022年度の活動ハイライト

事業内容

#一人に寄り添う

- 8 居場所づくり事業
- 10 食事支援
- 11 訪問支援 | 保護者支援
- 12 学習支援

#仕組みを広げる

- 14 ナレッジ展開

#社会を動かす

- 16 政策提言
- 17 普及啓発
- 18 人材育成 | メディア露出

LFA 座談会

- 19 LFA、NPOで働いて見えてきたこと

22 SUPPORTERS

- 24 認定取得のお知らせ
- 26 収支報告
- 27 団体概要
- 28 編集後記
- 29 応援の仕方

代表メッセージ

2022年度もLFAはたくさんのチャレンジをしました。現場での子ども支援においては、「地域協働型子ども包括支援」の実践をさらに前に進め、多くの子どもたちに早期から切れ目のない支援を提供することができました。複数年に渡って、同じ地域の行政・学校・住民・他NPO等の様々な連携先とネットワークを築き、地域の子どもの支えてきたことで、地域の子どもの支える力が上がってきていることを実感しています。政策提言においても、こども家庭庁準備室の複数の委員を務め、こども家庭庁の創設に向けた様々な提言を行いました。中でも、LFAの困難を抱える子どもに対する居場所づくり事業がモデルとなった「児童育成支援拠点事業」が法定事業化されたことは、とても大きな成果であったと考えています。そして実はこの法定事業化の動きは、学生時代にLFAで長年ボランティアをしてきていた方が、LFAの活動の重要性と意義を省内の関係者に伝え、勉強会に僕を招いてくれたことから始まりました。そこから、大臣をはじめとした担当者の方々が現場を視察に来てくださり、最終的に国の事業として法定事業化されるに至りました。活動を続けていくこと、自分達だけではなく様々な人を巻き込んでやっていくことの大切さとそのパワーの大きさを感じた出来事でした。

2022年度もサポーターの皆様の温かいご支援をいただき、困難を抱える子どもたちへ支援を継続することができました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

しかしながら、現実に目を向けると、コロナ禍の長期化やロシアによるウクライナ侵攻を背景とする物価高の影響もあり、困窮世帯の子どもや保護者の置かれる状況は引き続き厳しいものとなっています。そして残念ながら、子どもの自殺や虐待や不登校の状況は悪化の一途を辿っています。

日本の未来を担う子どもたちが、このような状況に置かれていることは絶対に見過ごせません。

LFAとしては、この状況に真正面から向き合い、子どもの今と未来の権利を守り抜くために、より一層活動を前に進めていきます。ただし、我々だけの支援では限界があります。ぜひ皆さんの力を貸してください。LFAを通じて、一緒に子どもの貧困問題の解決を目指しましょう！

2023年7月1日
NPO法人 Learning for All
代表理事 李炯植



すべての子どもたちが
自分の可能性を信じ、

自分の力で人生を
切り拓くことのできる
社会を目指して

MISSION

子どもの貧困に、本質的解決を。

貧困、虐待、発達障害、いじめ、社会的マイノリティなど、
生きづらさを抱える子どもたち。

「安心」を奪われている。

「努力を信じられる環境」を奪われている。

「自分自身の可能性に気づく機会」を奪われている。

そこでは、諦めが日常化してしまっています。

2010年、学習支援からスタートした私たち Learning for All は、
現場の経験から、この問題を解決するには
「学び」を支えるだけでは足りないと確信するに至りました。
現在では、一人の子どもが自立するまで、
地域で連携して幅広くサポートできるモデルを構築。
全国へ広げるとともに、法・制度を変え、
子どものあらゆる「貧」と「困」をなくす社会をつくらうとしています。

VALUES

Children First …………… 「子ども主語」で考えつづける

Change for All …………… 本質的解決のために変わりつづける

Inspire for All …………… 関わる人ぜんぶに学びの機会をつくる

Collaborate for All …………… つながって、いっしょに創る

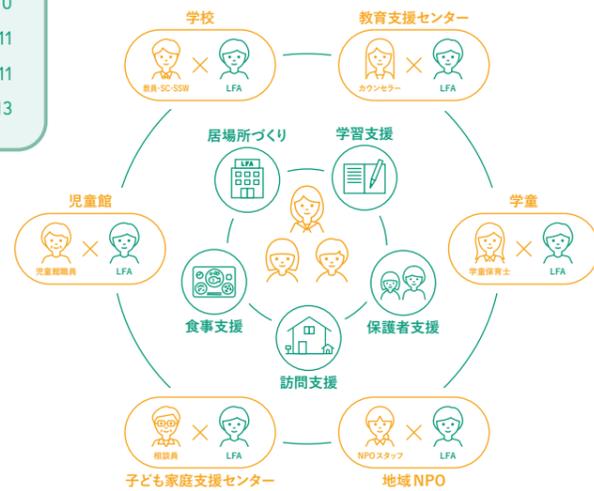
3つのアプローチ

今日の前にいる子どもに、どこまでも寄り添うこと。
 社会の仕組みそのものを、本気で変えていくこと。
 そのどちらが欠けても未来はつukれない。
 私たちは、志を同じくする全ての人たちと力をひとつにし、
 3つのアプローチで課題の
 本質的解決を目指しています。

アプローチ1

一人に寄り添う

- 居場所づくり 8-9
- 食事支援 10
- 訪問支援 11
- 保護者支援 11
- 学習支援 12-13



地域の大人の支援ネットワークづくり × 子どもたちへの包括的な支援提供

地域協働型子ども包括支援

地域のあらゆる立場の大人たちのネットワークをつくり、支援の必要な子どもを見逃さず、早期につながる。成長段階に合わせ、必要なサポートを6~18歳まで切れ目なく行う。私たちは、そんな「地域協働型子ども包括支援」を展開しています。

LFAの提供する支援メニュー

6~18歳の子どもの状況に合わせて、幅広い支援内容を柔軟に展開しています。

2022年度LFA直営提供サービス数

都・県	市・区	拠点数
東京都	葛飾区	20
	板橋区	4
埼玉県	戸田市	6
茨城県	つくば市	6
兵庫県	尼崎市	1



アプローチ2

仕組みを広げる

ナレッジ展開 14-15



現在の日本では、子ども支援に関わる人・団体の努力にもかかわらず、支援の「量」「質」とともにまだ足りていないのが現実です。
 LFAでは、これまで培ってきた実践的な支援のノウハウを、全国の子ども支援団体や企業に提供。日本中の子ども支援者がつながるネットワークづくりにも取り組むことで、「地域協働型子ども包括支援」の全国展開を推進しています。

アプローチ3

社会を動かす

- 政策提言 16
- 普及啓発 17
- 人材育成 18
- メディア露出 18

目の前の子どもにどこまでも寄り添う。その重要さは疑う余地がない一方で、問題を真に解決するためには世論の形成や、社会の仕組みを変えていく必要があります。
 LFAは現場での支援活動や、全国の子ども支援団体とのネットワークづくりを通して、課題の普及啓発・人材育成・政策提言に取り組んでいます。



2022年度の活動ハイライト

1

一人に寄り添う

1,356名の子どもを直接サポート

2022年度は、居場所づくり・学習支援・訪問支援等で、計1,356名の子どもたちをサポートしました。ソーシャルワーカーの採用にも力をいれ、訪問支援や別室登校など、より連携や個別の関わりが必要なケースにも手厚く対応しました。



一人に寄り添う # 仕組みを広げる

2 尼崎にて、拠点オープン・公民協働の研修を実施

2022年5月に、代表・李の出身地でもある尼崎市に関西初の拠点を開設しました。また、尼崎市の職員、尼崎市内で活動する子ども支援を行う民間の団体職員に向けて、研修を実施しました。

2

3

仕組みを広げる

「ゴールドマン・サックス地域協働型子ども包括支援基金」にて4団体への継続助成が決定

昨年度発足した、全国の子ども支援団体を資金面・非資金面でサポートする「ゴールドマン・サックス地域協働型子ども包括支援基金」。計画通り4団体への助成が終了したと共に、4団体への継続助成が決定しました。

p.14へ…

p.16へ…

社会を動かす

4 居場所づくり事業がモデルとなった「児童育成支援拠点事業」が法定事業化

2022年6月の児童福祉法の改正により、子どもの居場所事業が「児童育成支援拠点事業」として法定事業化されました。今後は、自治体や民間団体の負担が少なく事業の実施が可能となるため、子どもの居場所が全国に広まることが期待されます。

4

5

社会を動かす

5 課題啓発ムービー『子どもって、』を公開

子どもの貧困問題を知る・考えるきっかけとなることを目指して、動画『子どもって、』を制作、12月の寄付月間に合わせて公開しました。動画では、子どもたちの日常生活における何気ないコマを切り取り、“表面上の印象”と“その印象の裏側にあり得る実態”という2つの側面を対比しています。



p.17へ…

p.24へ…

認定NPO法人になりました!



〇 #一人に寄り添う

居場所づくり事業

小学生～高校生世代(6～18歳まで)の子どもたちに、安心して過ごせる居場所を提供する事業です。その子の個性や保護者さまの状況に合わせた個別の支援計画を立て、一人ひとりに寄り添った支援をおこなっています。

支援した子どもの数：108名

※2022年度実数

小学生の居場所

生活習慣の学び直しや遊び・学習サポートとして、学童保育のような形で週5日運営



中高生の居場所

不登校や家庭・学校に居場所がない子どもを対象に週3日運営



2022年度は、安心できる居場所や基本的な生活習慣の定着に加えて、拠点外の体験活動や職業体験の機会も多く設けました。

春

拠点对抗ソフトボール大会

地域の高校のグラウンドをお借りして、複数エリアの拠点に通う子どもたちが集まりソフトボール大会を開催しました。「次はバスケ？」など、継続的な開催を望む声も多く上がり、拠点を超えての交流も生まれています。



子どもの声



初めて水切りをした。
初めて火を使った。
初めて車を見た。
初めてじゃがいもの皮をむいた、初めてこんなに肉を食べた。

夏

サマーキャンプ

「夏休みにキャンプに行きたい」という子どもたちの声から実現した、一泊二日のサマーキャンプ。釣りやバーベキュー、星空鑑賞会、テント泊など、日ごろなかなかできない体験を、思いっきり楽しみました！



アスレチック施設遠足

秋

ビルの3階くらいの高さにある綱と足場を渡ったり、50mくらいのジップラインを滑ったりしました。森の中で、思いっきり叫んだり、怖い～と泣きながら進んだり、自分がどれくらいの速さで足場を進めるか試したりして、リフレッシュしました。



お正月飾りづくり

冬

水引きを使ったお箸置きと、しめ縄飾りを作りました。飾りの種類や飾る理由についても教わり、子どもたちはやる気満点。水引きの結び方は大人でも苦戦する結び方でしたが、粘り強く一生懸命に取り組む姿が見られました。簡単にはいかない分、完成した時の喜びも大きい様子でした。



職業体験

1 | ポリフォニー・デジタル様でカーレース制作!

“あらゆる子どもに、きっかけになる、感動体験をつくる。”をミッションに掲げる一般社団法人プロジェクト希望と連携のもと、リアルドライビングシミュレーター「グランツーリスモ」シリーズを手掛ける株式会社ポリフォニー・デジタルの東京スタジオを訪問。ゲーム制作現場の見学とレースゲームづくりの体験を行いました。子どもたちは、社員からレクチャーを受け、各々でレースの難易度や世界観を考えてプログラミングに挑戦。最後はみんなでコースを走らせました!



最高におもしろかった!
天気の値を1メモリ変えるだけでレースが全然変わってくる緻密性におどろいた。

子どもの声



2 | ラコステ様でコーディネート体験!

オフィスを訪問し、商品陳列や全身コーディネートのイベントを実施していただきました。また、服のデザイン制作の現場も見学することができ、子どもたちも社会に出て働くということのイメージが湧いたようでした。



✂️ #一人に寄り添う

食事支援

子どもたちの健やかな育ちには、栄養のある食事がかかせません。経済的に困難を抱えていたり、仕事で忙しい保護者の方に代わり、子ども食堂の他、フードパントリーや食料品の配送まで、様々な方法で子どもたちの「食」を支援しています。



食事支援の累計食数：2,199食

にぎやかな声が戻ってきた！ 子ども食堂

コロナ禍の影響でお弁当配布のみに切り替えていた子ども食堂ですが、少しずつ制限も緩和される中で、みんなで集まって遊ぶ時間が復活しました。外の公園で遊んだり、中でカードゲームをしたり。久々にあった子ども同士、大変盛り上がっていました。



ハラールフードにも対応、フードパントリー

今年度も様々な企業様・団体様のご協力のおかげで、食材の配布を行うことができました。また、今年度はハラールフード*の提供も始めることができました。LFAの拠点に通うお子さんやご家族の中には外国ルーツも少なからずいらっしゃいますが、宗教上の理由で食べられない食品が多々あります。日本語を読めないために食品のラベル確認をすることも困難で、あまりフードパントリーの活用はされていませんでした。しかし今回、日本では手に入れることが難しく、高額になりがちなハラールフードの提供が叶ったことで、大変喜ばれ、再びご家庭と繋がることできるようになりました。

*ハラールフード … イスラム教において食べることが許されている食品や料理のこと。



✂️ #一人に寄り添う

訪問支援

訪問支援実施回数：112回

さまざまな理由で拠点に直接通うことが難しい子どもたちのために、個別のニーズに合わせて、話し相手として近況や悩みを聞いたり、一緒に遊んだりすることで、子どもたちが安心して社会に踏み出せるよう、丁寧に伴走支援を行なっています。



訪問支援 のエピソード

小学4年生から不登校となり、社会とのつながりがなくなっていることに不安感を覚えた保護者の方が学校へ相談、スクールカウンセラーからLFAを紹介されて訪問支援を開始した女の子がいました。支援当初は「学校にいてほしい」「朝起きて自分のことをやってほしい」という保護者の願いは多々ありましたが、本人が何に引っかかっているのかわからない状況でした。その子と一緒に、生活の中で起こっていることを丁寧に言語化し、困り感を整理することで、初めて自分の体験について話ができるようになりました。そして、感情や行動をコントロールする感覚が高まり、起床や留守番など自身で対処できることが増えていきました。今は、スクールカウンセラーとお話しに行くことを目標に頑張っています。

✂️ #一人に寄り添う

保護者支援

子どもたちを支えるためには、保護者の方のサポートも欠かせません。LINEやメール、電話、対面と様々な手段を活用し、日々の悩み相談だけでなく、支援制度の紹介・窓口への繋ぎ等も対応。保護者さま同士の繋がり作りとして、保護者会等も実施しています。



学習支援

小学4年生～高校生世代(9～18歳まで)の子どもたちを対象に、地域や学校と協力して無償の「学習支援拠点」を運営しています。

質の高さと継続性にこだわり、

独自の研修を受けた大学生ボランティアが教師となって、

日々の学習に課題を抱えた子どもたちに寄り添って勉強を教えています。

支援した子どもの数: 175名 ※2022年度実数

学校内学習支援

1対2～3の担任制の指導で、週1回×3か月のプログラムを年4回実施



公民館学習支援

不登校や、日本語に慣れていないなど、学校での個別対応が難しい子を対象に週2回の1対1の個別指導を実施



2022年度は、自主事業で行っていた別室登校*の支援が自治体の事業として予算化されるなど、その必要性が認められました。

*別室登校…学習に大きな遅れがある子や、不登校の子どもが、他の生徒のいる教室とは別の教室や保健室等で過ごしたり、授業を受けること。

通常クラスでの支援



- ・ 学習の遅れの解消を目的とした1対2～3の担任制の指導
- ・ 週1回×3か月のプログラムを年4回実施
- ・ 主に大学生スタッフが対応

「別室登校」の子どもたちへの個別支援



- ・ 学習の遅れの解消を目的としつつも、不登校の子の居場所的な役割も。給食も一緒に食べる
- ・ 週1～2回/1日3～5時間実施
- ・ 主にLFA職員が対応

別室登校のエピソード

じっくり子どもと関わることができる「別室登校」という場で、不登校の子どもだけではなく、日本語サポートなど丁寧な関わりを必要とする子どものサポートもしてくれないか、と学校側から相談を受けて繋がった外国ルーツの女の子がいました。当時小学2年生だったその子は、「教室」や「ふでばこ」という言葉も知らなかったようでした。その中で学校生活を送ることに、彼女はさまざまな不安や困りを抱えているのではないかと感じました。

初めて彼女が別室登校にきた日、「何が好き?」と聞くと、彼女は「勉強が好き、日本語は難しいけど面白い」と教えてくれました。そこで彼女が面白いと言っていた日本語と一緒に練習することにしました。それに加えて、不安が少しでもなくなってほしいと思い、翻訳機や絵を使って色んな話を彼女としました。1か月経った頃には彼女が歌ったり、話したりする様子が増え、わからないことを積極的に質問し



てくれるようにもなりました。1年ほど経った頃には、担任の先生から、授業中に手を挙げて発表してくれるようになったという話も伺いました。彼女と関わって、子ども自身の成長していく力はすごいと感じました。今後、子どもたち自身のもつ素敵どころがちゃんと発揮される環境作りのためにも、「別室登校」のような取り組みを広げていきたいと思っています。

公民館拠点のエピソード



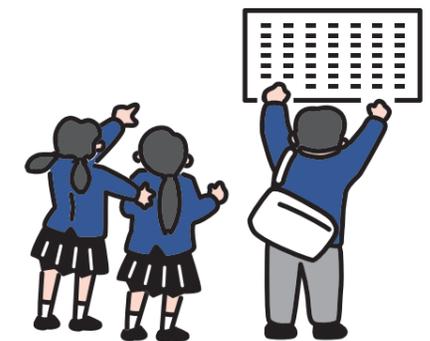
関わり始めた当時中学2年生だった男の子。もうすぐ中学3年生で、受験について本格的に考える時期に差し掛かっていましたが、テスト勉強はほとんどしておらず、提出物も出していなかったそうです。ある日高校進学について考えるワー

クを行うと、彼は「軽音部に入りたい」「行事が楽しい学校に行きたい」と高校でやりたいことを教えてくれました。また、これから何を頑張りたいか聞いてみると、全ての教科について頑張りたいことを書き出してくれました。その後の学習支援の授業では「家で勉強してみた」という話をしてくれたり、学校での提出物を持ってきてくれたりすることもありました。一方で「家で勉強したい気持ちになることもあるが、兄と共同の机しかないので、落ち着いて勉強する場がない」と教えてくれることもありました。その様子を見て、今まで進学や勉強について丁寧に考える時間や場がなかっただけで、本当は彼なりにやってみたくことや頑張りたいことがあったのではないかと思います。

今後も学習支援を通じて、やりたいことを見つけたり、頑張る気持ちをサポートしたり、子どもたちの力や気持ちを引き出していけるよう、日々子どもたちと関わっていきます。

2022年度 子どもたちの進学状況

戸田	高校受験者数3名 / 合格者数3名
つくば	高校受験者数5名 / 合格者数5名
葛飾	高校受験者数8名 / 合格者数7名 大学受験者1名 / 合格者数1名 専門学校受験者2名 / 合格者数2名



〇 # 仕組みを広げる

ナレッジ展開

現在の日本では、子ども支援に関わる人・団体の努力にもかかわらず、支援の「量」「質」ともにまだ足りていないのが現実です。

LFAでは、これまで培ってきた実践的な支援のノウハウを全国各地の子ども支援団体や企業に提供。同じ志を持つ子ども支援者がつながるネットワークづくりにも取り組むことで、

「地域協働型子ども包括支援」の全国展開を推進しています。



ゴールドマン・サックス

地域協働型子ども包括支援

2021年5月、地域で困難を抱えた子どもと早期に出会い・繋がり・支える包括的な体制を構築し、「地域協働型子ども包括支援」を実現することを目的として、「ゴールドマン・サックス 地域協働型子ども包括支援基金」を創設しました。

助成先の団体へは、資金の提供だけでなく、団体のニーズに応じた研修の実施や、他の助成団体との交流の場を提供するなど、様々な形で伴走しています。

2022年8月に4団体のタイプBへの助成が終了し、成果報告を行いました。また、4団体のタイプAへの継続支援が決定しました。



● 全国9団体に助成を実施

タイプA (地域協働型子ども包括支援構築・組織基盤強化助成)

NPO法人いるか (福岡県福岡市)
「福岡の子ども達を地域で包括的に支える支援体制の構築モデル事業」

NPO法人STORIA (宮城県仙台市)
「支援を必要とする子どもと保護者のための地域包摂事業」

NPO法人ダイバーシティ工房 (千葉県市川市)
「子ども達への切れ目ない支援実現のための地域基盤強化事業」

NPO法人ビーンズふくしま (福島県福島市)
「子どもの権利保障」を目的とした自主事業化に向けた基盤整備プロジェクト」

タイプB (子ども支援活動強化助成)

NPO法人アスイク (宮城県仙台市)
「拠点に参加できない子どもとつながるためのオンライン支援の構築」

一般社団法人SGSG (岡山県岡山市)
「経済的困難を抱える中高生のための商店街まるごとおかえりプロジェクト」

NPO法人ケアット (兵庫県神戸市)
「ACT LOCAL KOBE」

NPO法人抱樸 (福岡県北九州市)
「地域連携包摂型世帯支援『北九州子ども・家族まるごと支援事業』」

子ども支援ナビ

子どもたちの抱えている複雑な課題に対し、一つの専門性だけで対応できないのが子ども支援。2021年度に開設した全国の子ども支援者がノウハウを共有し、支え合えるオンラインプラットフォーム『子ども支援ナビ』では、子ども支援やNPOの資金調達、組織づくりなどの多岐にわたるナレッジ記事を公開、また子ども支援に関わる有識者をお招きし、トークイベントを開催しています。

記事テーマ一例

- ・子どものために大人が手を取り合う社会をつくるには
- ・子どもの進路選択をサポートするために
- ・虐待通告対応フローの整備

・ユニークユーザー数：2,936名/月
 ・ナレッジ掲載数：170
 ・イベント開催数：9回
 ・イベント参加人数：延べ367名

公民協働研修

2022年度は、尼崎市に居場所拠点を開設したとともに、代表李が尼崎市の青少年問題協議会 ユースワーク推進部会員を務めていたことがきっかけとなり、尼崎市の子ども支援の最前線で日々活動している行政と民間支援団体の職員に向けて、5回に渡り『尼崎市子ども支援おなかもプロジェクト』を実施しました。

行政と民間、立場は違えど、同じ研修を受けることで、お互いの理解を深め、より尼崎市の子ども支援の協働体制を強化することを目指しています。

23年度も引き続き、尼崎市と協働して当プロジェクトを実施予定です。

2022年度実施内容

	形式	テーマ
第1回	研修	プロジェクトキックオフ
第2回	研修	子どもの貧困、アウトリーチ
第3回	視察	京都市の子ども支援団体への視察
第4回	研修	福祉と教育の連携
第5回	研修	プロジェクト総振り返り



イベント一覧

- vol.7 『子ども、若者を支える地域ネットワークづくり〜草の根ささえあいプロジェクトの実践事例〜』
一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト 代表理事 渡辺 ゆりか 氏
- vol.8 『孤立する若者とながり、支えるには〜オンライン相談「ユキサキチャット」の取組〜』
認定NPO法人D×P理事長 今井 紀明 氏
- vol.9 『ゲームを通じて、困っている子ども、若者をつなげるには〜サンカクシャの実践事例〜』
NPO法人サンカクシャ代表理事 荒井 佑介 氏
- vol.10 『「市民性」を耕して、子どもが孤立しない地域をつくる
〜NPO法人PIECESのCitizenship for Childrenの試み〜』
認定NPO法人PIECES理事/ソーシャルワーカー 斎 典道 氏
- vol.11 『「ゴールドマン・サックス 地域協働型子ども包括支援基金」の実践報告
〜自治体と協働して作り上げた、NPO法人アスイクの包括支援とは〜』
NPO法人アスイク代表理事 大橋 雄介 氏
- vol.12 『NPO法人抱樸の「子ども・家族まるごと支援」とは
〜「ゴールドマン・サックス地域協働型子ども包括支援基金」の実践報告〜』
認定NPO法人抱樸常務 山田 耕司 氏
- vol.13 『対話を重ねて、子どもを共に支える地域をつくる
〜認定NPO法人Learning for Allの実践事例〜』
認定NPO法人 Learning for All 入澤 充・塩成 透
- vol.14 『上間陽子さんと共に考える〜困難を抱える子どもたちと寄り添い合うには〜』
琉球大学教育学研究科教授 上間 陽子 氏
- vol.15 『子どもたちのありのままを大切に居場所づくり
〜認定NPO法人STORIAの居場所“サードプレイス”〜』
認定NPO法人STORIA代表 佐々木 綾子 氏

～助成先における成果～

仙台市で子ども支援事業を展開するNPO法人アスイク

「ゴールドマン・サックス 地域協働型子ども包括支援基金」を活用し、オンラインの学習支援を通じて延べ604名（1年間）の子どもに支援しました。

また、生活困窮家庭に対してアンケート調査を実施（29件）し、オンラインを活用することの有効性が明らかになりました。調査レポートは、宮城県の「子どもの学習・生活支援事業」にオンライン学習支援の追加に対する根拠資料として活用され、結果として、宮城県の委託事業「子どもの学習・生活支援事業」にオンライン学習支援が支援メニューの1つとして追加されました。



参加者の声



様々な所から参加された方と出会って同じような事で悩んでいたり考えている事がわかった。これからは子どもたちを支援できる“資源”として活動を行なっていきたい。



公民共に、同じような課題意識を持っているということを改めて知ることができた。

政策提言

LFAは自団体の活動や、全国の子ども支援団体との協働を通じて得た知見を基に、課題の普及啓発・政策提言活動を積極的に行っています。

子どもの居場所事業が「児童育成支援拠点事業」として法定事業化

2022年6月の児童福祉法の改正により、子どもの居場所事業が「児童育成支援拠点事業」として法定事業化されました。LFAは、こども家庭庁設置法、こども基本法の成立前後において、これまでの実践を踏まえ、地域協働型子ども包括支援を行うためのポイントを提言、勉強会を実施するなど、事業化に貢献しました。児童育成支援拠点事業ができたことで、居場所づくりに対して国の財源から予算がつくようになり、自治体や民間団体の負担が少なく事業実施ができるようになり、今後全国

に子どもの居場所が広まっていくことが期待されます。

また、その取り組みが評価され、代表・李が『こどもの居場所づくりに関する調査研究事業検討委員会』の委員や『こども大綱検討に向けた内閣官房有識者会議』の臨時委員に、子ども支援事業部エリアマネージャー・宇地原栄斗が『こども家庭庁 こども家庭審議会 部会臨時委員』に就任しました。今後もより実効性の高い制度の実現に向けた政策提言活動を継続して参ります。

東京大学との連携により調査・事業評価を実施

地域と連携して実施する子ども支援（地域協働型子ども包括支援：CES）の更なる深化や展開を目的として、CESの特徴と、それが子どもたちにいかなる影響・効果を及ぼしているかを実証的に把握するための事業評価活動を実施しています。

2021年度 → 2022年度 → 2023年度

子どもの貧困や格差解消へ向けて共同研究を推進することを目的に、東京大学との教育・研究交流連携事業を開始しました。

2023年3月9日に、東京大学大学院教育学研究科と合同で「子どもの貧困」に関する公開シンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、これまで行ってきたLFAと東京大学の共同研究の意義の発信や「実践とアカデミアの連携（現場の実態を捉えながら、研究に活かす）」事例を増やしていくことの必要性・重要性」を訴求し、今後の協働調査をさらに発展させていくための発表やディスカッションを行いました。

地域協働型包括支援の実態に関する大規模調査を実施。2024年3月ごろ、結果の考察等をお伝えするシンポジウムを計画しています。



普及啓発



動画『子どもって、』公開

子どもの貧困問題を知る・考えるきっかけとなることを目指して、動画『子どもって、』を制作、公開しました。LFAが「子どもの貧困」の解決に向けて活動する中で直面した「日常生活において、子どもの貧困は見えづらく、社会課題として自分ごと化されづらい」という事実に対する問題意識を起点に制作。動画では子どもたちの日常生活における何気ないコマを切り取り、「表面上の印象」と「その印象の裏側にあり得る実態」という2つの側面を対比しています。

研修・講演登壇

「社会課題」をテーマに、11社、延べ約560名を対象に研修を実施。新入社員、シニア向けなどの階層別研修から、SDGsや社会課題を幅広く考える手挙げ研修など、様々な形式で行いました。

テーマ例

- ・新入社員研修
「社会人として、ビジネスを取り巻く社会課題を理解する」
- ・シニア向け研修
「これまで獲得してきたリソース・スキルを、社会課題解決に応用する」

また、東京大学や大正大学等、大学の講義やイベントでの講演を通して、社会課題の普及啓発に積極的に取り組みました。

2022年度講演・講義・イベント登壇実績

7月	新渡戸文化小学校 立志塾 東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構オープニングイベント
9月	令和4年度 九州子どもフォーラム
11月	株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ「子どもの貧困セミナー」 『子どもの生きるを支える地域包括の支援』 実践から読み解くこれからの地域包括社会のキーワード リディフェス「孤独孤立-共助の可能性を模索する-」
12月	寄付と教育とSDGsと 誰一人取り残さない世界を目指して
2月	これからの子ども支援のあり方とは ～こども基本法・こども家庭庁の動きから～ 広がれ、子ども食堂の輪！推進会議 つくばSDGsフォーラム Regional Banking Summit (Re:ing/SUM) × 日経地方創生フォーラム

企業研修の参加者の声



「相対的貧困が解決することはない。1億人がそのことを考えるようになってアクションしていく世の中を目指している」という言葉がとても印象に残りました。まずは自身ができること、本プロジェクトが終わっても何かアクションに繋げていければ良いな、と思いました。

#社会を動かす

人材育成

305名の大学生がLFAの研修を受け、学習支援の現場や居場所づくりの現場で、ボランティアとして活躍しました。卒業した大学生ボランティアの多くは、アラムナイとしてゆるやかに繋がりながら、様々な業界から子どもの貧困（社会課題）を解決するリーダーシップを発揮してくれています。



・学習支援に参加した大学生数：119名
 ・居場所づくりに参加した大学生数：186名
 ※2022年度実数

#社会を動かす

メディア露出

家庭の事情や貧困と学力の関係について子どものために大人ができることは



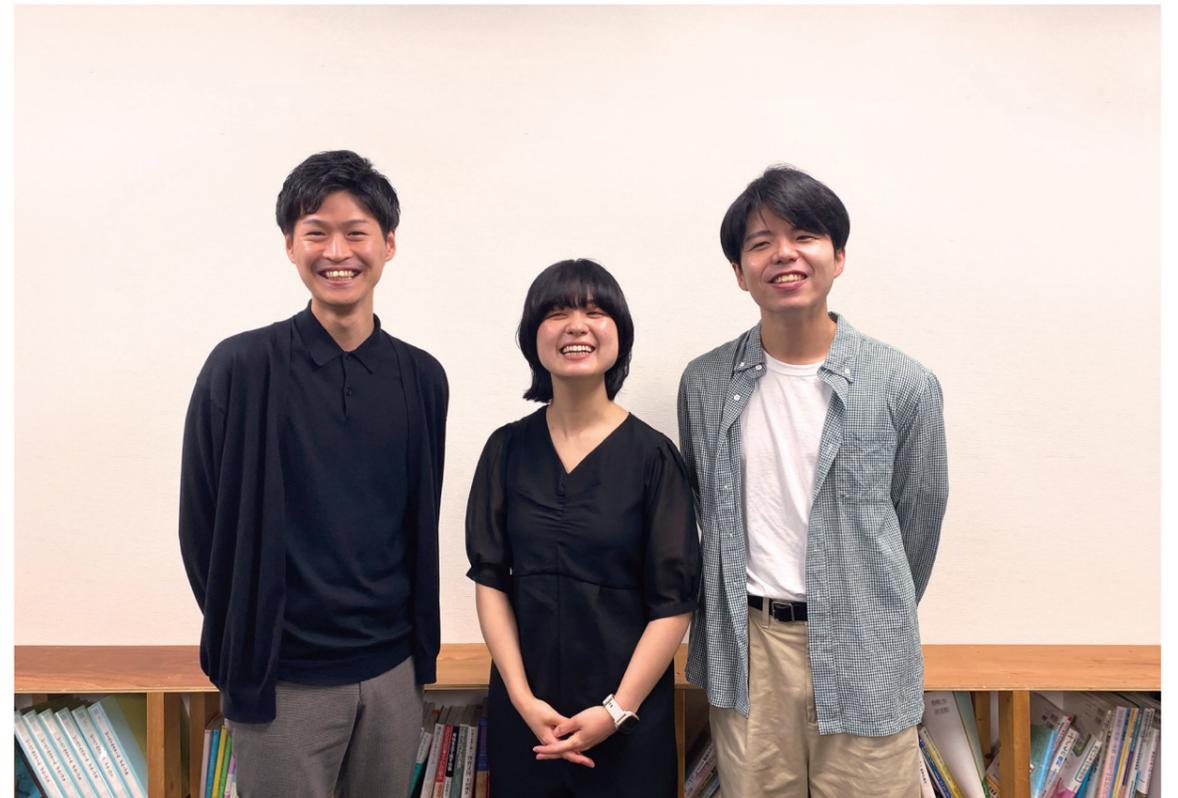
※同、「子どもの貧困」「教育格差」という言葉がよく聞かれるようになりました。一足先ですが、課題をいかにして課題が解決によって学習の機会を奪われ、成績が



2022年度は、web4本、新聞3本、ラジオ1本、雑誌2本、計10本のメディア取材に応じ、それらの記事や番組を通して、子どもたちの現状やLFAの取り組みについて発信いたしました。

時期	種類	媒体
2022年 5月25日	web	ソクラテスのたまご
6月9日	新聞	日本経済新聞
6月15日	新聞	朝日新聞
6月23日	ラジオ	朝日新聞ポッドキャスト
8月18日	web	政治山
8月22日	新聞	琉球新報
9月21日	雑誌	SPUR
11月1日	web	朝日新聞デジタル
2023年 2月20日	web	日経テレ東大学
2月27日	新聞	AERA

2022年度メディア掲載実績（※抜粋）



LFA 座談会

LFA、NPOで働いて見えてきたこと

今回は、LFAの現場を支える3人に、NPOで働くことに対して持っていたイメージや魅力、LFAで活動する中で感じた自分の変化や嬉しかったことなどをインタビュー。普段はなかなかお伝えする機会がない、働く職員の思いや日々子どもに寄り添う中で芽生えた気づきをお届けします。

池田流輝さん（いけだ・りゅうき）（左）
 2019年度入職。2014年に大学生ボランティアとして関わり始め（その時はまだ前身の団体であるNPO法人Teach for Japan）、新卒でLFAに就職。現在は、オンライン学習支援の責任者や居場所のスタッフ、地域の団体さんとの折衝など幅広く担当。オフの時は・・・将来地元で子ども支援を行うために、地方の子ども・若者について学んだり、気分転換にコロナ禍に購入したキーボードを弾くなど優雅に過ごす日があれば、疲れ果てて昼まで寝て、家事をこなして気づいたら夜、なんていうゆったりとした休日も。

吉原聡子さん（よしはら・さとこ）（中央）
 2019年度入職。東京都で中学校の英語の教員をしている時に、校内で学習支援を行っていたLFAを知る。（その時すでにインターンとして拠点をまわっていたりゅうきさんと出会っている！）その後、LFAに転職し、現在は小学生向けの居場所拠点の責任者を担当。オフの時は・・・子どもの頃からテレビっ子で、今でも毎シーズンドラマをチェック、3つ程に絞って全て録画する。舞台やライブなどのエンタメ全般が大好きで、舞台は毎月、映画は月3回行くほど。「やだな。」と思いつつも、終わった後の気持ちよさのために日々公園で筋トレに励んでいる。

塩成透さん（しおなり・とおる）（右）
 2021年度入職。大学生の頃から地域づくりに興味があり、大学院で公共政策を学ぶ。院生時代にインターンとして活動していたまちづくりをする会社に入社。まちづくりを考える中で、声の届きにくい「子ども」に興味をもち、LFAに転職。現在は、中高生の居場所運営や、地域の団体さんと一緒に、どうやって子どもを支えて地域を作っていくのかを考える地域連携を担当。オフの時は・・・奥さんと一緒にカフェに行き、それぞれ読書。仕事柄共通の話題も多いため、読書した内容についてディスカッションすることも。時間があればずっとYoutubeを見ているので、拠点での子どもとの話のネタには困らない。

はじめに、“NPOで働く”ということについて聞かせてください。“清貧”など、世間のイメージは色々あるかもしれませんが、抵抗はなかったですか？

吉原 組織の形態がどうかというより、何がやりたいかの方が強かったです。私が入職した時はNPOもまだそんなにたくさんあるわけでもなかったから、採用過程で色々とは話は聞いたけど、今ほど具体的にイメージできてない部分もあって、正直に言うと、割と飛び込んだ感じが強い。それから、これまでとは違うアプローチで社会の構造を変えられないのかみたいなのはありました。大きい組織だとやっぱり年功序列だったりするし、教員のときもそうですけど、「この学校をこうしたい」と思ったら、校長になるしかない。既存の構造の中で何かを変えていくというのはすごく難しい。その枠組みから出て、外の立場で学校や教育に対してできることはないかなと考えました。

池田 今吉原さんの話を聞いて思い出したのが、僕がLFAに入職したきっかけです。僕は教育学部に通っており、親も教員だったので、“教員とは、教えることとは”を実際に経験してみたいという思いからボランティアを始めたのですが、LFAにのめり込んでいくようになる理由の一つとして、教員よりも決まっている枠じゃないところ、狭間の中で実践しやすいという点がありました。実践・行動をしてみると、そこから色々なところに変化を起こせる可能性を感じられ、NPOというかLFAで活動するこ

とに学生のときから魅力を感じていました。塩成 僕も自分の気持ち的にはほとんどハードルはなかったですね。大学生の頃に地元NPOに関わっていた経験があることに加え、大学院で公共政策を学ぶなかで行政、議員と並んでNPOの役割の重要性をとて感じていました。またNPOがいかにも持続可能に活動していけるかということも調べていた時期もありました。組織として身近だったこともあり、仕事としてやっていくという心配もほとんどなかった。それから、仕事するときにストレスをあまり抱えたくないなと思ったんです。仕事して使ってる時間がすごく長いじゃないですか、1週間で40時間くらい使ってる。その中で、納得いかないわだかまりを抱えながらその時間を過ごすのは本当に嫌だったので、目的を持って、それにちゃんとコミットできるような組織をと考えた時に、NPO、LFAでした。

それでは入職して実際にLFAで仕事をすることになって、嬉しかったことや自分が変わったと思うことなど、強く心に残っていることを教えてください。

吉原 一番変わったのは、大人の立場や子どもとの関係性に対する考え方です。教員のときはどうしても教えることや生徒指導という立場が多かったのですが、LFAの現場に来てからは、子どもと一緒に毎日生活して暮らしていくということが、すごく何気ないことが、本当に尊いことなんだな、と強く思うようになりました。家族

でもないし、保育している立場でもないのだけれど、一緒に暮らしている。私は大人で、子どもより少しだけ長く生きてるから叱ったりするときもあるけど、普通に子どもと喧嘩するときもあって。でも毎日1個めっちゃめっちゃ爆笑することが起きたりもする。それが他のスタッフに対しても、家族じゃないんだけどでも家族に近いような気持ちを抱くというか。私が何かをしてあげるといってではなくて、子どもと作る日常の中で、そこで「自分は愛されたな」とか、「みんなで楽しかったな」という記憶を私も残してもらってるし、子どもにもおそらく残っている。そういう日常が、本当に尊いなと思っています。

それから、地域のステークホルダーと仕事をするなかで、お互いの環境やバックグラウンドが違う状況で、どうやったら目線を合わせられるかという点に対して、最初1人では全然うまくできなくて大変だなと思うこともありました。今は「一致していける相手と話して同じ方向にたどり着けるように頑張ろう」と考えられるようになりました。

塩成 地域の方々との関わりについては、僕は恵まれているのかもしれないけど、あまり難しいなあと感じる経験がありませんでした。想いが通い合えばとっても嬉しいですが、通じ合えなかったとしても「悲しいけどそんなこともあるかー」とひとまず楽観的に捉えます。その後、通じあえるポイントはどこだろう？とその方との関わりを振り返りをします。これが結構楽しいんです。今やりとりをさせていただいている行政の担当

の方は想いが通じあえる方なんです。「子どもにとってこれが大事だから一緒にやってみましょう！」と伝えると「わかります！一緒に頑張りましょう！」みたいな感じです。担当の方が熱い想いを持って各方面に僕らの事業の良さを伝えていただいた結果、今は居場所の事業を委託いただけるようになりました。だから、地域と一緒に作っていくという話でいくと、この行政の方の協力なしでは、事業として、今の居場所を作ることができなかった。本当に嬉しかったなと思いますし、こういう時は本当にやりがいを感じます。もちろん歯がゆい思いをすることもありますが。子どもにとってこういうことが大事なんです！というのを熱意を持って伝えても、地域の方の理解をなかなか得られない経験もしました。なぜだろう・・・と考えることもあります。その組織やその人、その地域なりの理由があって、それにいかに寄り添いながら一緒に手を取り合っていくかが大事なんだと思っています。LFAが活動しているエリア毎に活動している組織や人も様々なので、子ども支援のあり方もエリアごとに異なり、多様なんだなと感じています。りゅうきくんのエリアは市長さんが教育に対して強い熱意をお持ちで、李さんを子ども政策推進アドバイザーに入れていただいていることもあり、市として子ども支援を推進している印象があります。

池田 そこは本当に大きくて、市長さんの強いリーダーシップももちろんですが、2019年に自主事業の拠点、2020年に市からの委託の拠点が始まり、やりとりさせていただいている担当課の皆さんとは、風通

しよくコミュニケーションできているので、現場の子ども目線で事業が展開されているように思います。もちろん全てが順風満帆に進むわけではないですが、いい方向に変わっていきそうだなって、楽観的かもしれないけど、何となくの期待感も持っています。

嬉しかったことを考えて思い出したのは、ある男の子が「楽しかった！」と話している姿を見た時に、「この楽しかったという日常が続いていくといいな」という風に感じられた時の事です。冬に一泊二日でスキーに行くイベントがあったのですが、その帰りの車内で「スキー場に引き返せ！」というブーイングが子どもたちから起きたことがありました。それからそのイベントが終わった後も、普段の送迎で家に送る時とか、家まで迎えに行き、拠点まで乗せて来たりする中で、その男の子からスキーの話や泊まりに行った時の話が出てくるのがよくありました。普通の会話があるというか、こういうちょっとした楽しいことを経験することができて、楽しくて誰かに話しかちやうみみたいな瞬間があること。本当に日常の風景の中でのひとコマだったんですけど、それはすごい嬉しかったなっていうのを覚えてます。そしてやはりこういう瞬間や時間を作っていくことこそ自分のやることだよと、改めて感じた瞬間でした。

いつも応援してくださっているサポーターの方々に向けて、メッセージをお願いします。

吉原 まず、子どもたちと日常を作っているのは、サポーターのみなさんのお陰なので、本当に感謝しています。それから、応援してくださっているみなさんとの関係について最近よく思うことがあるので、そのお話をさせていただきます。拠点には、障害に関わらず、不登校とか経済的に困っていたりとか、みんなちょっと生きづらいなという気持ちを抱えてきてるんですけど、その子どもたち同士は割と偏見なく受け入れ合っていて。偏見を持っていたのは私だったんじゃないかと思うようになりました。だからそこを無理に乗り越えるわけじゃなくて、対等に繋がって、毎日暮らしていき、どんな人か分かるようになる。お互い迷惑かけることもあるけどちょっと譲り合って、でもやっぱり葛藤もある。だけど一緒に生きていく。そういうことが拠点の日常にはあって、その営みを応援してくださる皆さんがいると思っています。拠点だけで生きているわけではなくて、寄付者の方とか企業さんとかみんな含めて、みんなで一緒に生きていくという感覚を最近持ち始めています。なので、お金の支援だけではなくて、社会と一緒に作っていくという気持ちで、寄付者の方と私達も人としては対等に、一緒に生きていけるような社会と一緒に作っていきなという話を拠点でもよくしています。

塩成 今のお話を伺って、もう本当にめっちゃ共感しています。応援してくださっている方々と、どういう思いで寄付をしていただいているのかなど、すごくお話してみたいです。一緒に生きていくという意味でも、対話する機会があればと思っています。今回は僕らの話をしましたが、寄付者の方々がどういう思いを持って関わっていただけたのか是非知りたいです。いつもありがとうございます。

池田 本当にいつもありがとうございます。吉原さんがおっしゃったように、対等という表現がしっくりくるかわからないですけど、自分は直接子どもたちと関われるなど感じたからこの立場で関わっていて、その中でやれることをやるし、サポーターの方々もその立場からやれることをやってくださっている。そういう役割分担で成り立っていると感じているので、僕自身その任せられる立場＝現場で、やれることをしっかりと精一杯これからも頑張っていきます。



SUPPORTERS

2022年度は、4000名を超える個人サポーター様と、
100社近い企業／団体様に様々な形でご支援いただき、活動することができました。

個人サポーターの皆さま

2022年度も多くの方々に関心をお寄せいただき、約4300名の個人サポーターの方にご支援をいただきました。

※2023年3月末時点

年間個人サポーター数



個人サポーターの声



理屈で論理的にも取り組んでいるが、子どもとも直に接している熱意も感じた。感動をもらっている。



着実に「有言実行」してるのが凄い。現場のみならず、社会を動かすということまでとんとん実現している。

～「#はじめての寄付」キャンペーンを実施～

12月の寄付月間に合わせて、日本でも寄付が当たり前になる社会を目指して、啓発キャンペーンを企画しました。

寄付経験者の方々の素敵な一歩＝「はじめての寄付」をした時の想いやエピソードを発信することで、寄付でできることやその意義を広く社会に伝えたいと考え、SNSでの発信やイベントを実施しました。

ご自身のはじめての寄付の経験やその時の思いを語っていただくイベントでは、登壇者から「一滴の水も集まれば希望の水になる。一人の力はわずかだが、集まるとうねりを作っていくと信じている。」という力強い言葉もありました。

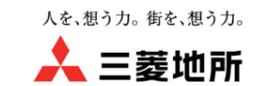


※こちらのキャンペーンは終了しています。

企業／団体サポーターの皆さま

下記をはじめとする企業様・団体様より、寄付・助成金をいただいて活動させていただきました。

また、企業サポーター様からは、金銭的な寄付のみならず、イベントや体験の機会の提供、物資のご寄付等、様々な形でご支援いただきました。



アイディール・リーダーズ株式会社
株式会社インフォメーション
株式会社 ウィル・シード
株式会社HRインスティテュート
株式会社エコ・マイニング
株式会社おやつカンパニー
キャノンマーケティングジャパン株式会社
株式会社協和
株式会社極東商会
国立新美術館
一般社団法人G・B

シュローダー・インベストメント・マネジメント株式会社
ストリートアカデミー株式会社
一般財団法人 全国学生保障援助会
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント
損害保険ジャパン株式会社
中外製薬株式会社
株式会社ドゥ・ハウス
東京玉川ライオンズクラブ SDGs支部
東洋一通商株式会社
doTERRA CPTG Essential Oils Japan 合同会社
株式会社トリプルバリュー

株式会社日本能率協会マネジメントセンター
PwC コンサルティング合同会社
株式会社ビジョナリー・ライズ
三井住友DSアセットマネジメント株式会社
株式会社ミーミル
株式会社 ラコステ ジャパン
株式会社 Ridilover

企業サポーターの声



会社として個人として関わらせてもらっているが、多くを学ばせてもらっている。社会貢献は与えるよりも「与えられること」の方が遥かに多いことを実感しています。



ゴールイメージを持ち、政策提言を見据えて現場の取り組みもこなしている数少ないNPO。かつ、人材供給源としても大きな役割を果たしており、大きなインパクトだと感じています。

2022年6月28日、 LFAは認定NPO法人になりました！



2010年に前身の団体からの事業独立から始まったLFA。その時に活動していたスタッフは代表の李をはじめ学生ボランティアのメンバーが中心となっており、常勤職員はほとんどいない状態で教室の運営から資金集めまで奔走していた状態でした。

「出会った子どもたちを見捨てるわけにはいかない」という強い気持ちだけでがむしゃらに走り続けるなかで、たくさんの方々の力をお借りして、ようやく認定取得となりました。

認定NPO法人とは、一般のNPO法人よりも「客観的な基準において、高い公益性を持っている(=一定の基準を満たしている)」ことを所轄庁に認められた法人のことです。

今後も、継続的に透明性高い活動をしていくために、管理体制や社内規定の制定・運用の徹底などにもより一層力を入れて参ります。

認定申請担当者インタビュー

認定取得の立役者である経営管理部ディレクター・辻さんに、認定証受け取りのタイミングでインタビューをしました！



辻さんは学生の頃からボランティアとして関わっており、新卒で民間企業に就職しましたが「どんな子どもも、生まれた地域や環境によらず、自分の未来に期待し、自分の生き方を選択していける社会を実現したい」という思いからLFAに戻ってきました。入社と同時に取り組み始めた“認定取得”というミッション。そのミッションを達成した瞬間の辻さんのインタビューの一部をご紹介します。

— 今のお気持ちは？

時間もかかり大変でしたが…ようやく認定されました！（やったー！）明日から認定NPO法人です！

— 2年半を一言で言い表すと？

大変でした…。改めて社内の規定や様々な管理フローを可視化、改善点の洗い出しをして、1つ1つ整備する作業が続くので、とても地道で長い戦いでした…
しかし、そのプロセスを通じて、より健全な組織運営をしていくために必要なことを学べたと思っています。

— そんな大変なことを、頑張った理由は？

LFAがやっていることが対外的にみてもちゃんとして、しっかりした団体だと認められるために、みなさんの活動が恥じないものだとすることを証明する一心で頑張りました。

悲願の認定取得に、喜びが溢れていた辻さんでした。

これからは税制優遇も適応されるので、いつも応援してくださっている皆様に、ようやく少しご恩返しができるなと嬉しく思っています。引き続き、認定の名に恥じない活動を続けて参りますので、これからもLFAをどうぞよろしくお願いたします。

税制上の優遇措置について

認定NPO法人への寄附金は、申告によって、所得税や個人住民税について、税制上の優遇措置を受けることができます。

個人の方からのご寄付

寄附金控除の対象となります。くわしくはお近くの税務署や国税庁のウェブサイト等でご確認ください。

例：3,000円を毎月ご寄附いただいた場合

所得税 (36,000円 - 2,000円) × 40% = 13,600円が控除されます。

住民税

- ・ 東京都以外在住の場合
→ 住民税の控除はありません
- ・ 都内（新宿区以外）在住の場合
→ 都民税4%のみ控除となります
(36,000円 - 2,000円) × 4% = 1,360円
- ・ 東京都新宿区在住の場合
→ 都民税4% + 区民税6%が控除されます
(36,000円 - 2,000円) × 10% = 3,400円

上記の所得税控除と住民税控除の合算金額が、寄附金税額控除の対象となります。

・ 控除を受けるには、お届けする「寄附金受領証明書」（領収書）を使用しての確定申告が必要です。「税額控除」もしくは「所得控除」のいずれか有利な方をご選択いただけます。多くの場合「税額控除」を選択されますと、寄附金の最大約5割が控除されます。

・ 控除額には一定の上限額があります。
計算式：(その年中に支出した寄附金額の合計額 - 2,000円) × (所得税控除 40% + 住民税控除 0~10%) = 「寄附金税額控除額」
寄附金特別控除に関するくわしいことは、お近くの税務署にお尋ねください。

法人からのご寄付

寄附・申告により、損金算入限度枠が拡大される優遇措置があります。くわしくはお近くの税務署や国税庁のウェブサイト等でご確認ください。

・ 法人が認定NPO法人等に対し、その認定NPO法人等の行う特定非営利活動に係る事業に関連する寄附をした場合は、一般寄附金の損金算入限度額とは別に、特定公益増進法人に対する寄附金の額と合わせて、特別損金算入限度額の範囲内で損金算入が認められます。

・ なお、寄附金の額の合計額が特別損金算入限度額を超える場合には、その超える部分の金額は一般寄附金の額と合わせて、一般寄附金の損金算入限度額の範囲内で損金算入が認められます。（内閣府NPOホームページより）

認定NPO法人に対する寄附金に係る特別損金算入限度額

- ① 資本がある法人の損金算入限度額
(期末資本金の額 × 0.375% + 所得金額 × 6.25%) × 1/2
- ② 資本がない法人の損金算入限度額
所得金額 × 6.25%
※ 所得金額 = 所得金額 (当期純利益に税務調整をした額) + 寄附金の支出額

モデルケース：資本金1,000万円 所得金額1,000万円の場合

- ① 特別損金算入限度額 33.1万円
 - ② 一般損金算入限度額 6.9万円
- 上記、①②合算金額の40万円まで損金に算入可能です。

領収書（「寄附金受領証明書」）について

税制上の優遇措置の対象となるご寄付の「受領日」は、決済代行会社から当団体への入金日となっています。クレジットカードの決済日や口座からの振替・引落日と異なりますので、ご注意ください。

決済日・振替日・引落日では、下記の期間が優遇措置の対象となります。

- ・ クレジットカードの場合 11月30日決済分まで
- ・ 口座振替・引落の場合 11月27日振替・引落分まで
- ・ LFA口座への振込の場合 12月31日振込分まで

※領収書は、原則、再発行いたしかねます。大切に保存してください。

※こんなときはご連絡ください

- ・ 領収書に記載されている名前・住所・金額に不備がある場合
- ・ 名前がカタカナ・ローマ字などになっていて、表記の変更を希望される場合

なお、引越し等で住所が変更されている場合、旧住所宛の領収書をそのまま提出できます。くわしくは、新住所のお近くの税務署にお尋ねください。

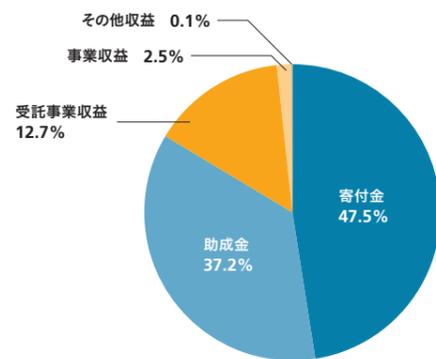
お問い合わせ先

認定NPO法人 Learning for All コミュニティ推進事業部

収支報告

収入

科目	金額 (単位: 円)
収入	
寄付金	213,341,415
助成金 (助成団体・企業からの助成金)	167,028,374
受託事業収益	56,900,046
事業収益 (啓発事業収入)	11,541,031
その他収益 (雑収入等)	392,938
合計	449,203,804



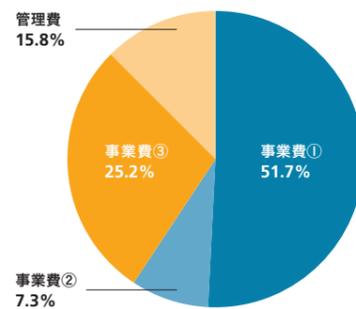
2022年度の経常収入は、前年度比14%増の約4.5億円となりました。

収入の内訳は、寄付金が2.1億円(約48%)、助成金が1.6億円(約37%)、事業収益が6.8千万円(約15%)でした。2021年度までは、期限付きの助成金の割合が最も高かったところから、個人サポーター様・サポーター企業様から多くのご支援をいただき、寄付金が対前年度比36%増となり、最も多い割合となりました。特定の事業に紐づかないご寄付を有効活用させていただき、子どもたちのニーズに応じた柔軟な支援提供を引き続き行ってまいります。

2023年度は「仕組みを広げる」活動として、休眠預金事業の資金分配団体としての事業を採択したため、助成金収入の割合が一時的に大きく拡大する予定ですが、個人・企業の皆様も、使途や期限に制限のないご寄付で継続的にご支援いただけますと幸いです。

支出

科目	金額 (単位: 円)
支出	
事業費 ①一人に寄り添う(現場支援)	222,089,310
事業費 ②仕組みを広げる(ナレッジ展開)	31,449,895
事業費 ③社会を動かす(普及啓発)	107,990,960
管理費	67,562,865
合計	429,093,030



LFAは、3つのアプローチに基づいて事業を行っています。①「一人に寄り添う」活動として、子どもへの直接支援(学習支援、居場所づくり、食事支援など)、②「仕組みを広げる」活動として、ノウハウ展開やナレッジサイトの運営、③「社会を動かす」活動として、メディアを通じた課題の普及啓発活動や人材育成、政策提言活動など。

経常支出は、対前年度比12%増の4.2億円となっておりますが、事業支出の割合については21年度と大きく変更しておりません。(①の直接支援が約52%、②③の間接支援・政策提言活動が約32%)

認定NPOの取得を契機に、管理部門の体制強化等、ガバナンス強化に取り組んでおり、管理費の割合は21年度の約13%から約16%へと増加しております。

2023年度は「仕組みを広げる」活動としての休眠預金事業の資金分配団体としての活動が始まるため、他団体への助成金支出等新しい支出を予定しております。その他の支出については概ね22年度と同程度の割合を予定しています。

団体概要

設立 2014年7月23日
所在地 東京都新宿区新宿5丁目1-1
 ローヤルマンションビル404
従業員数 職員51名、業務委託24名、インターン39名
 (※2023年7月18日時点)
事業内容 私たちは、「子どもの貧困」を本質的に解決するために、下記の3つの事業に取り組んでいます。

1〈一人に寄り添う〉
 困難を抱える6~18歳の子どもが自立するまでを、早期から切れ目なくサポートする、居場所づくり・学習支援・食事支援・保護者支援・訪問支援などを通じた「地域協働型子ども包括支援」の実践。

2〈仕組みを広げる〉
 「地域協働型子ども包括支援」の全国展開を目指した、ノウハウ提供・共有プラットフォームの運営。

3〈社会を動かす〉
 現場での支援活動や全国の子ども支援団体とのネットワークづくりを通じた、普及啓発・人材育成・アドボカシー活動。

沿革

- 2010** 学習支援事業を開始
(現 認定NPO法人 Teach For Japan 内の一事業として)
- 2011** 東京都北区における学習支援事業が「北区改革プランベスト1」を受賞
- 2014** NPO法人 Learning for All を設立
- 2016**
 - 居場所づくり事業を開始
(日本財団の子どもの貧困対策プロジェクト第1号拠点として)
 - 食事支援・保護者支援・普及啓発活動を開始
 - 代表 李が「全国子どもの貧困・教育支援団体協議会」の理事に選出
- 2018**
 - 6~18歳まで切れ目なく支援する「地域協働型子ども包括支援」モデル構築に着手
 - 第5回エクセレントNPO大賞および課題解決力賞を受賞
 - 代表 李がForbes「30 UNDER 30 JAPAN 2018」に選出
 - LFAの知見を他団体へ共有するノウハウ展開事業を開始
- 2019** 中高生向けの居場所づくり事業を開始
- 2020** コロナ禍における支援家庭を対象にしたニーズ把握調査を開始・発表
- 2021**
 - 子ども絵支援のノウハウプラットフォーム『こども支援ナビ』運用開始
 - 「地域協働型子ども包括支援基金」を設立
 - 東京大学大学院教育学研究科と教育・研究交流連携事業に関する協定を締結
- 2022**
 - 認定NPO法人を取得
 - 代表 李が「内閣官房のこどもの居場所づくりに関する検討委員会」検討委員に選出
 - 代表 李がこども家庭庁「こどもデータ連携ガイドライン検討会」メンバーに就任
 - 代表 李がつくば市こども政策推進アドバイザー会議のアドバイザーに就任

役員紹介



代表理事 | 李炯植
 1990年、兵庫県生まれ。東京大学教育学部卒業。東京大学大学院教育学研究科修了。2014年に特定非営利活動法人 Learning for All を設立、同法人代表理事に就任。これまでにのべ10,500人以上の困難を抱えた子どもへの無償の学習支援や居場所支援を行っている。全国子どもの貧困・教育支援団体協議会 副代表理事。2018年「Forbes JAPAN 30 under 30」に選出。2022年「内閣官房のこどもの居場所づくりに関する検討委員会」の検討委員に選出。



理事 | 熊平美香
 昭和女子大学キャリアカレッジ学院長 ハーバード経営大学院経営学修士課程修了



理事 | 大越一樹
 ベイン・アンド・カンパニー・ジャパン パートナー フランスHEC経営大学院経営学修士課程修了



理事 | 鈴木栄
 一般社団法人 ソーシャル・インベストメント・パートナーズ 代表理事 一般社団法人 ジャパン・フィランソロピック・アドバイザー 代表理事 California Institute of Technology 物理化学博士号修得

監事 | 渡辺伸行
 TMI総合法律事務所 パートナー 早稲田大学法学部卒業 ニューヨーク大学ロースクール卒業



編集後記

今年は、子どもたちの姿や各事業の活動・成果をサポートの皆さまによりリアルに、より分かりやすく届けたいと思い、年次報告書の編集委員に他事業部からも有志のメンバーを募ることにしました。

「それぞれのお仕事も繁忙期中、誰か参加してくれるかしら・・・」と不安でしたが、とても心強い二人が手を挙げてくれました！（二人の素敵な編集後記も掲載しております^^）

これが本当にありがたく、なかなか言語化が難しい物事の繋がりや現場の葛藤などを的確に表現してくれ、更にそれぞれの職員のものさし報告書を作成することができました。

読んでくださっている皆さまがどう感じられたか、お聞かせいただくと嬉しいです。

さて、個人的に2022年度を振り返ると、『思い描いていた世界が現実になろうとしている』そんな一年だったように思います。

5年ほど前の2018年10月、私は小学生向けの居場所の立ち上げのタイミングでLFAに入職しました。地域の関係者や学校の先生方、保護者の方々に「居場所」と言っても何のことやらで、「夕飯も出している学童のようなところ」です。学童よりは密に子どもに寄り添い・・・と説明して回っていたのを思い出します。それが最近「子ども支援ってどんなことしているの？」と聞かれて「学習支援や居場所の提供」と伝えると、当たり前のように理解してもらえるようになり、居場所が法

定事業に採択されるまでになりました。3年ぶりに発表された子どもの貧困率にわずかですが改善が見えたことも大変嬉しい変化です。（もちろんまだまだの数字ではありますが。。）

あの頃はここまでの大きなうねりになるとは想像もできず、今回の報告書の編集を機会に振り返った時に、「社会を動かす」ことに本気で挑戦すること、そしてその活動に思いを託し、支えてくださるサポーターの皆さまの存在は本当に大きく、大切なものであると改めて気付かされることになりました。

変わらぬご支援をいただいていること、厚く御礼申し上げます。

来年で法人設立10周年。2010年の事業独立から活動させていただいている自治体さんのお付き合いは、ゆうに10年を越えます。小学生だった子たちも就職を見据えるような年になり、子どもたちの将来を考えた時に、LFAとしてチャレンジしたい領域も広がっていきます。

これからも、悩み迷いながらも、それぞれの持ち場でやるべきことを力の限りやり抜く仲間の姿を伝えていければと思います。

次の社会を変える一歩も、LFAと共に歩んでいただければ幸いです。

コミュニティ推進事業部・広報
岸本 尚子

ふだん政策提言や調査などの活動に従事しています。間接的な（しかも1組織だけの努力や単独の物事が直接つながるものではない、大変やこしい）業務で、本当に子どもたち（や向き合っている大人）のためになっているのか？と自問自答しながらお仕事させていただいています。

分かりづらさを紐解いて、協働していくために小さくてもできることをしていけたら、そのことが結果として子どもたちのためにつながると信じて、政策周りで起きていることの翻訳(?)に関わらせていただきました。

編集委員としてできたことは少ないですが、コミュニティ推進のメンバーのお仕事・周りにいらっしゃる応援者の方の存在を感じて、感謝の気持ちでいっぱいです。

ラボ・政策提言チーム
佃 真衣

2022年度、わたしはLFAに入職し、たくさん子どもたちと過ごしました。英語を勉強したり、学校や家での出来事をお話したり、謎解きをして遊んだり…。困ったこと、大変なこともあるけど、日々を一生懸命に生きる子どもたち。その1人1人に素敵な強みがあり、したいことがあり、いろんな想いがあるということを感じてきました。そして、わたしが知った子どもたちの素敵な一面を、少しでもみなさまにも伝えられたら！そう思って、年次報告書作成に携わらせていただきました。

これからもたくさん可能性を秘めた子どもたちが、一步一步前へ歩みを進められるよう、みなさまが仲間であってくださると大変嬉しいです。

子ども支援事業部・学習支援チーム
榎原 惇子

【デザイン】内山耀一朗 【イラスト】長濱啓輔、内山耀一朗

ご意見・ご感想

当年次報告書をお読みいただいた感想やLFAへのご意見を、是非お聞かせください。

下記の専用フォームやメールアドレスより、ご投稿いただけます。

年次報告書 ご感想専用フォーム：<https://forms.gle/dB1mm8Quzr1ppvnSA>

メールアドレス：lfa-community@learningforall.or.jp



あたたかい応援をいただき、心より感謝申し上げます。

困難な状況に置かれた子どもたちを継続的に支えるため、
今後も一人でも多くの皆さまからのご支援が必要です。

ぜひ、周りの方にも子どもたちの現状や、
私たちの活動について広めてください。



各種SNS・メルマガに登録する

LFAでは、子どもの貧困について理解が深まる記事や、支援の現場からの活動レポートなどをSNSやメールマガジンにて随時お届けしています。

ぜひフォローして、いいね！やシェアで、子どもたちの現状をもっと知り、広めていただけないでしょうか。



活動説明会に参加する

子どもの貧困やLFAについてご関心をお持ちの皆さまに、LFAのスタッフによる無料の説明会を行っています。説明会の前半ではLFAの活動をより深く知っていただき、後半では交流の場も設けています。ぜひ、ご友人や職場の方、ご家族などお誘い合わせの上お気軽にご参加ください。

※現在、オンラインで開催中です。



▲お問合せはこちら



グッズで応援する

子どもたちのアイデアで生まれたカレンダーや、活動にご賛同いただいた地域の企業様との共同制作による鉛筆など、オリジナルのグッズを販売しています。

利益は全額、子どもたちの支援に使われます。

ご友人やご家族にプレゼントすれば、「子どもの貧困」やLFAについてお話いただくきっかけにも。



▲ショップはこちら



企業向け研修会を開く

企業にお勤めの方向けに、社内研修を提供しています。「子どもの貧困」を通じて、社会課題について理解し、課題解決の当事者となっていられるようなプログラムを提供いたします。

ニーズによってカスタマイズすることが可能です。

新入社員教育だけでなく、SDGs施策の一環としても、人事/CSR/サステナビリティ推進等のご担当者様にご好評いただいております。

※オンラインでの開催も可能です。



▲詳しくはこちら